

演劇研究——ますます演劇化する現実から別の現実をえぐり出す

平田栄一朗

文学部独文学専攻 教授

3年生11名、4年生6名が参加し、難しいテーマに対しても積極的に意見を述べています。「全世界は劇場なり」の立場から身体論・精神分析論・メランコリー論も取りあげています。

「劇場型社会」「政治的パフォーマンス」「演出」「演技」「大震災のカタストロフィ」などの広く流布された表現から察せられるように、演劇的な要素は現代社会や日常生活に浸透しています。またこれらの言が「やらせ」「大げさ」「大きな不幸」などを意味するように、社会の演劇的要素はしばしば否定的あるいは皮相的なものとみなされています。

演劇学はこの否定的に捉えられがちな現実の演劇的要素をすぐに退けるのではなく、それらの要素に潜む「もう一つの」現実を解明しています。たとえば政治は内実の伴わない「パフォーマンス」だと指摘されますが、最近の演劇・政治研究では、権力機構が（自己の外部にある）演劇的な手段を利用するのではなく、権力そのものに演劇的要素が内在しているという見方が有力です。政治家が見せかけの言動に走りがちなのは、政治が墮落しているからだけでなく、それが政治権力の内在性と関わっているからです。政治家は自分の主義主張を人々にアピールし、共感を得ようとはしますが、そのためには

適切な自己表現をしなければなりません。この自己表現の問いにパフォーマンス的な要素が必然的に含まれているのです。同様の試みは「悲劇」という考え方にも当てはまります。最近の悲劇研究は、従来の論で指摘されてきた（社会や全体に対する）個人の犠牲の問題よりも、「自分らしさ」を過剰に求める欲望の問題を重視します。私たち現代人は財力の許す限り、他人に迷惑がかけられない限り、自由に生きる権利が与えられています。しかしこの自由を追求すればするほど、私たちはいつそう自分に物足りなさを感じ、今の自分に「プラスα」を求めがちです。最近の悲劇研究はこの自己追求の過剰な傾向を、現代人にとって不可避な「運命」とみなして、欲望と悲劇の関係を問い直しています。

このように演劇的な要素は、現代社会と密接に関わっています。にもかかわらず私たちは「演劇的なもの」を絵空事や他人事とみなしがちです。演劇学は敬遠されがちな問題を直視し、根底から捉え直しているのです。

演劇的な世界を発見すること

みやしたかんじ
宮下寛司君 文学部独文学専攻4年

私たち平田ゼミでは、古来の悲劇論やパフォーマンス理論などをもとに世界の演劇性について学んでいます。

私たちは普段、現実が演劇であると考えたことはあまりないでしょう。平凡な日常がドラマチックだとは思わないからです。でもたとえば目の前にいる人の「さりげない」「自然な」振る舞いには、演劇的な要素が仕込まれていることがあるのです。ゼミナールで私たちは発表や意見交換を通じて演劇性の構造を見つけ出し、日々生きる世界を再発見し、驚きを感じています。

ゼミ発表で私たちはテーマや文献を自由に選び、他のメンバーがそれに対して意見を述べています。これを繰り返すことで、私たちは各自の関心領域を互いに掘り下げています。



21世紀の音楽を探る

音楽創造の現場より。

いわたけ

とむら

環境情報学部 教授

情報テクノロジーを応用し、音を中心としたマルチメディア作品の制作と研究を行うことが私のゼミのテーマです。この分野で創作を行うには研究が不可欠ですので、新作と同時に論文も出来上がるようになります。成果の発表を行う場合は、主に海外の国際会議です。現代のアーティストは同時に表現の研究者なので、活躍している人々は博士号を持っていることが多いのですが、しかしバックグラウンドはさまざま

まで、芸術系、数学系、工学系、生物系等多岐にわたっています。学会もありますが、クリエイティブな人が多いので堅苦しい雰囲気は皆無です。例えばMAX/MSPやPureDataの作者として著名なミラー・パケットは、冗談を言い合うようなかつてのクラスメートでした。

それで「半学半教」ですが、私のゼミでは自然発生的にいつも起きていますように思います。自分のアイデアや作品をプレゼンテーションし批評し合うので、お互いにどんどん進化していきます。そうこうするうちに面白いもの

ができてきて、そのまま国際会議へ行ってきま〜すという感じです。ゼミへはあまり顔を出さない代わりにクラブシーンへ出撃していく学生諸君もいて、彼らはその方面では相当な有名人みたいですよ。

私たちの作っている音の響きはいわゆる「サブカル」系のものに似ている側面もあるようなので、例えばアメリカから日本のサブカルチャーの研究をするために私のゼミにやって来て、自分もマイナーレーベルからコンピュータ音楽作品を出し、今はなき渋谷のHMVでCDの売り上げがトップになってショーケースに展示され、その業績（だけではありませんが）によりSFCから博士号を授与され、今では母国アメリカで活躍するアーティスト兼大学教授になっている人もいたりします。日本のサブカルの方ってすごいですね。少なくとも音楽に関しては、大学のアカデミックな文化とサブカルチャーの間でも「半学半教」があるように思います。

岩竹研 (CSP) のいいところ

はなの いしゅんすけ

花野井俊介君 政策・メディア研究科修士課程1年

岩竹ゼミは、学部の研究会（和声、作曲）と、大学院のプロジェクト（Cyber Sound Project）に分かれています。「電子音楽の研究室」とされていますが、実際は「音」に関連するものであれば、何でもOKです。そこに何の意味があり、なぜ作るのかなどがしっかりとあれば、さまざまなアドバイスや意見がもらえ、制作できます。制作系の研究室の中でも「音」をメインで考えるため、少し特殊かもしれませんが、その分やりがいがあります。そして、メンバーは皆「音楽」「音」が大好きです。その気持ちがあれば、自分が「音」を使ってやりたいことは何かを、見つけることができる最適な場所だと思います。

